



## 科学の価値中立説は正しいか—嶋田批判に答えて—

宗川 吉汪

一昨年の本誌「討論のひろば 原発を考える」は、筆者による、館野淳氏ならびに坂東昌子氏への批判から始まった(2012年1月号)。それに対して両氏からそれぞれ反論があった(2, 3月号)。つづいて、各氏からさまざまな意見が寄せられた(4~12月号)。

さらに筆者は、社会的責任の付託に応えるのは自立的科学者であると述べ、同時に池内氏の「科学価値中立」を批判した(本誌2013年7月号)。そして最近、館野氏および坂東氏の筆者への批判に対する反論ならびに池内氏の科学価値中立説への再批判を試みた<sup>1)</sup>。価値中立説に立つ限り科学者は権力から独立した自立的科学者になれないし、何よりそれは科学を権力の手に渡す仕掛けになっている、と論じた。

筆者の科学価値中立批判に対して、嶋田一郎氏は、科学の価値中立性を認めないと、それは自立的科学者の武装解除、ひいては日本科学者会議の自己否定につながる、と反論した(本誌2013年11月号)。はたしてそうだろうか。

**科学、技術、科学者**：Scienceはラテン語のscientia(知識)に由来する。明治初期に西周が訳語として「科学」をあてたが、それは多くの専門(科)に分化した学問(学)を意味する。一方、scientistという言葉はW. ヒューウェルが1840年頃に使い始めたと言われる。村上陽一郎氏は「科学」とそれを専門とする「科学者」が19世紀半ばの西欧に登場した、と述べた。J.D. バナールは、科学を科学者の営為とみなした<sup>2)</sup>。

西欧近代科学の特徴は、道具や数学、技術を応用することである。明治政府は、西洋科学の技術性に着目し、それを「実学」として利用し、富国強兵をはかった。この態度は現在の政府の科学政策にいたるまで脈々と受け継がれてきた。「科学技術」という日本発の概念も生まれた。

“かたい”価値中立説：マックス・ウェーバーは、事実と価値は互いに相容れ

ないものであるから、科学者は客観的・科学的な事実認識の表明にとどまるべきで、価値判断に基づく世界観や政治的立場を主張してはならない、として「価値中立説」を唱えた。科学や科学者はいかなる価値からも自由でなければならない。今これを“かたい”科学価値中立説と呼ぼう。

坂東昌子氏は、この“かたい”価値中立説の立場から「先入観や価値観を捨て真実を追究する、それが科学のマナー」で「科学者が信頼されるのは、価値観や自分の利益にとらわれないで、真実を語るから」と述べた。

これに対し、鯨坂真氏は以下のように批判した<sup>3)</sup>。事実と価値の間には絶対的壁はなく、価値判断は事実認識(科学)の道案内をし、事実認識は価値判断を覚醒させる。ウェーバーは、価値の対立を階級対立と捉えず、個人的問題に矮小化した。階級分化した現代社会では科学の研究・利用は階級性と無縁ではありえず、科学の成果は専ら大企業や大資本の利潤のために使われる。筆者も同感である。

“ゆるい”価値中立説：一方、池内氏は、科学や技術は本来的に価値中立であり、その産物は使いようでは天使の贈り物にも悪魔の企みにもなるとして、科学の両刃説に立つ。しかし科学者は価値から完全に自由になることはできず、真理(科学)と倫理(価値観)の狭間で悩む。それでも真理探究への欲求は科学者の「業」であり、研究のためなら軍から資金をもらう場合すらある、と池内氏は述べる(文献1参照)。これを“ゆるい”価値中立説と呼ぼう。嶋田氏が“ゆるい”価値中立説に立つことは明白だ。

“ゆるい”価値中立説は、科学が人間活動の一環であることを忘れ、科学を「真理」として神棚に祭る(真理信仰)。それは、731部隊の医学犯罪に免罪符を与える。いかなる意図(価値判断)であれ、得られた研究結果は「真理」で、「価値中立」であるとみなす。日本の医学界は

未だに戦時中の医学犯罪の検証を拒み、謝罪しない。

「科学価値中立神話」：科学の価値中立説は神話に過ぎない、と痛烈に批判したのは唐木順三や柴高篤弘のような反科学論者であった。核兵器を作り出した科学は“悪”であり、その科学を作り出した科学者は懺悔すべきだとして、科学の破棄を要求する。

嶋田氏は、筆者が核物理学は“絶対悪”と主張したとしているが、それは誤解だ。反科学論者ならそう言う、と書いたままで。誤解から出発した批判は見当違いになる。

野家啓一氏は、最近、福島原発事故によって科学技術の「価値中立神話」は崩壊した、と述べた<sup>4)</sup>。現代では科学と技術は一体であり、それを両刃とする善悪二分法はもはや成立せず、たとえ善意に基づく利用であれ意図しない災厄をもたらす。科学技術は「価値中立」ではありえない、と野家氏は主張する。原発設置が善意に基づくとは思わないが、科学の価値中立が幻想であることは確かだ。

\*

科学価値中立説の哲学的誤りは、事実と価値の相互浸透が理解できないことである。その実践的誤りは、結果(利益)優先で人権無視の生産・研究を容認すること、一握りの財界・大企業による生産手段(科学技術)の独占を見逃すこと、である。科学がさらなる発展を遂げるためには、99%国民が生産手段を握る必要がある。

## 引用文献

- 1) 宗川吉汪「原発事故から科学と科学者を考える」『唯物論と現代』No.50, 43-54 (2013)。
- 2) 宗川吉汪「科学者とは何ものか」『日本の科学者』42 (7), 28-29 (2007)。
- 3) 鯨坂真「科学者の責任と価値判断の問題」『季論21』No.20, 17-29 (2013)。
- 4) 野家啓一「3・11以降の科学技術と人間」『総合人間学7』pp.10-23 (2013)。

(そうかわ・よしひろ：京都支部，生命科学)